

現代に生きる北米インディアンのスエットロッジ*

浜 由美子**

1 はじめに

先住民の集まりで、「スエットに行った」とか「スエットで会った」とか聞いたのが、スエットロッジというものの存在に触れた最初であった。このように通常単にスエットと呼ばれているが、北米インディアンの間で何百年も前から行なわれてきたスエットロッジは、現在アメリカやカナダで最も広く執り行なわれているインディアンの伝統的儀式の一つである。単独で行なったり、サンダンスやビジョンクエスト¹など、聖なる儀式や、節目の儀式の前に精神的、肉体的浄めの目的で行なう準備儀式であったりする。この小論では、筆者のスエットロッジでの体験に基づいて、まず、スエットロッジというものがどういうものか具体的に明らかにしてから、その歴史的変遷、象徴的意味とその多様性、スエットの目的、および、この儀式が現在の北米インディアン社会においてどのような意義を持っているかを考察してみたい。詳細に一例として検討するスエットロッジは、カナダのバンクーバーにあるブリティッシュ・コロンビア大学の第一民族学習センター（First Nations' House of Learning）の敷地で行なわれていた女性のためのスエットで、筆者が1996年に半年間参加したものである。

2 初めてのスエットロッジ

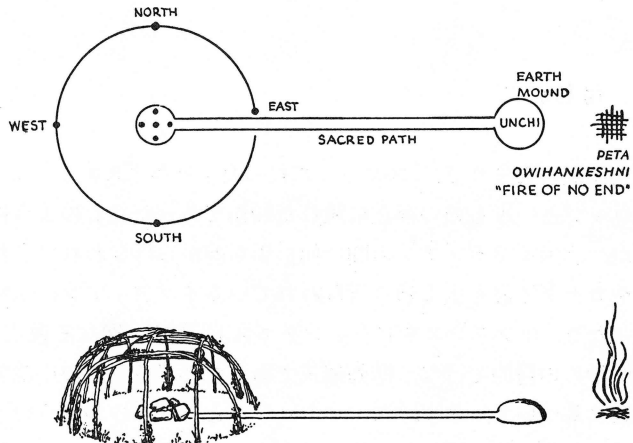
持ってくるものは、丈の長いドレス、タバコの捧げ物、祝宴用の食べ物というだけの指示を、スエットロッジ・リーダー N'kixw'stn James² から受けて、5月のある日曜日の昼頃、第一民族学習センター裏にあるロッジへと出かけて行った。ロッジと言っても、ドーム型をした毛布で覆われたテントのようなものなのだが、そのロッジの向こう側に、火を囲んで何人かが座っていた。まっすぐ行こうとすると、手で左側から回るように合図された。後で分かったのだが、ひとたび火が付けられたら、火の向こう側からぐるっとロッジを回って時計回りにしか行けないのである。³ 燃え盛る火の中に、大きな石が幾つか見えた。これらの石は火番（fire tender）⁴ が順に薪の中に組み入れたものであるが、それぞれの石を運ぶ前に、まず、タバコを捧げて感謝を表してある。陽射しの強い日で、火の側に座していると焼けるように暑い、皆が近況を話したり、リーダーに相談をしたり、冗談を言ったりしているのを聞きながら、待った。石がコロッと動いた。「さあ、祖父なる御霊（Tunkashila=Grandfather、火中の石に宿る霊）が、

*Contemporary Native American Sweat Lodge

**Yumiko HAMA, the Course of English Language & Literature

3回動いた」と、そのことを石が熱く焼けた合図として、女性は入る準備をした。金属類は一切身につけてはいけなかったと言われた。捧げ物のタバコは、ロッジの前の小さく盛り上がった小塚の祭壇に置いた。この祭壇の前後は儀式が終わるまで決して横切ってはならない。この祭壇には、先の二股のところに、赤い布と鷲の羽が付けてある棒が立ててあり、中に持って行けない大事なものを掛けておくこともできる。

こうして何も分からない状態で初めてのスエットの儀式が始まった。ロッジに入る前に、鮑貝を受け皿として、杉を燃やし、その煙を心臓から、頭、腕、体、足と、上から下へと招き寄せ、浄め (smudging) をした。リーダーの後を、初心者2人を間に挟んだ8名が、垂れ幕を上げてある西側の開き口から順番に「縁あるもの全てに」(Mitakuye oyas'in = All My Relations) と言いながら、這って回り込むように入って行き、各自持参し



The Inipi: "Purification Lodge"

The Sacred Pipe (p.33) より

たタオルの上に座った。ここで、間違っても中腰で行こうものなら、「謙虚に身を低めなさい」と注意される。地面に直接設置されたロッジには、床一面杉の枝⁵が敷き詰められていて、何ともいい匂いがした。実は、東洋からの客人が来るというので、特別にその日の朝刈ってきた枝を敷いてくれていたのである。ドーム型ロッジの直径は3メートル弱、高さは約1.2メートルで、床中央には、直径約50センチの円形に穴がくり抜かれてあった。円の中に円がある構造になっているわけだが、インディアンの儀式や集会で、この円 (サークル) というのは非常に重要な概念である。始まりも、終わりもなく続いていく生や時の流れを表していると言われるが、同時に、先住民の精神世界に顕著に見られる、この宇宙に生きるもの全ての限らない平等をも表しているのだということが、種々の儀式を通して実感できる。卑しい、哀れむべき存在としての人間は、決して他の人種やものより上位にあるわけではないと考えられている。

全員が座ると、真っ赤に焼けた石が中央の穴に一つずつ運び込まれてきた。その度に「祖父様、ようこそ」と言って、迎え入れ、最初のは西、あとののは、北、東、南、中央とそれぞれ決められた場所に、カリブーの角で、動かす。そのつど、石の上に、介添人が、セージ、甘草、セロリの種、ラベンダーの花穂など、ラウンド毎に違うものを振りかける。チラチラ赤く光る石の上にしゅっと燃え上がる煙と香りを、それぞれが招き寄せる。大きな石をどこに置こうかなどと冗談を言っているうちに、全員その場に落ち着いてくる。石が7つ運び込まれた時、入り口の垂れ幕は空けたままの状態、リーダーから、ラコタのイーグル・ソサエティーのスエットを執り行なうに当たって、自分がどういう資格を持つ人間かということ、ロッジの作り方、進行の仕方などの説明、および、諸注意があった。

袖付きの丈の長いドレスを女性が着るのは、戦士の流れをくむイーグル・ソサエティーの男性に敬意を表するためであり、生殖力を尊ぶゆえにロッジ内で女性はあぐらをかいてはいけない。ロッジの骨格は、柳の枝で組まれている。それは、柳が聖なる水との関係が深い、水際に生える木であり、かつ、再生を表す落葉樹でもあるからである。肋骨を象徴する12本ある柳の枝の上には、キャンバス地、毛布などが、幾重にも、中が真っ暗になるようにかけてあるのだが、その4方向には、西に黒（夏は青）、北に赤、東に黄、南に白の布が下げてある。これは、この世の4色の人種を表す。入り口は、女性の体内へ通じる口であり、蒸気立ちこめる温かい、真っ暗なロッジ内は、母親の胎内の中に居た時と同じ、安全に保護された子宮内の状態へと私たちを連れ戻してくれる。そこに‘祖父なる霊’や‘母なる大地’、種々の精霊を呼び入れ、祈るのである。⁶

このスエットロッジは、癒しのロッジで、入り口が、霊が訪れる方向である西側を向いている。4つのラウンドがあり、1回目は、創造主 (Creator)⁷ に、祈り、感謝を捧げるためであり、2回目は、女性 (sisters) のため、3回目は、男性 (brothers) のため、4回目は、自分のために祈る。⁸ 毎回石は7つずつ運び入れられる。祈る言語は何語でもよく、時計回りに祈っていく。各人が祈りの後には「緑あるもの全てに」と言うので、それが隣の人への合図となる。祈りが終わる毎に、石に水が掛けられ、次第に熱さは増していく。

諸注意としては、まず、邪霊との交信をする者、飲酒や、薬物の影響下にある人、生理中 (moontime) の女性は参加できないこと。⁹ 特に、生命を宿す力のある女性の月経中のエネルギーは非常に強くその場のエネルギーを乱すのだそう。また、できるだけやり通せるように耐えなければならないが、もし、熱くてどうしても我慢できなければ、「縁あるもの全てに。戸を開けてください」と言えば、垂れ幕をラウンドの途中でも開けてもらえること。熱かったり、酸欠状態になった時は、横になったり、ロッジの端に顔を向けると楽であること。鼻水など、全て自然現象は取り込まないで出すこと。喘息や心臓が弱い人、薬草にアレルギーのある人には辛いことなどが述べられた。さらに、祈りは必ず聞き届けられるから、理想の伴侶をと願う時には、祈り間違えないように、ご先祖様はお金は何であるか知らないから、お金を頼んでも無駄であるということなどがつけ加えられ笑い声が上がった。

次に、リーダーが、杉の枝を入れた水入りのバケツを、入り口の反対側に座っている介添人と一緒に、石の上で時計回りに4回まわしてチョンと石に付けてから、¹⁰ 杉の枝を使って石の上に7回水をかけた。¹¹ ワーと立ちこめる蒸気を全員が招き寄せる中、垂れ幕は下げられ、真っ暗闇となった。真っ赤にチロチロ光る石しか見えない。まず、ラコタ語で「聖なる4方向の歌」 (Four-direction Song) と戦士の歌が力強く歌われた。精霊を呼び入れるための歌は、スエットの重要な要素である。¹² 次に、リーダーがこの日スエットを執り行なう目的を簡単に述べた後、リーダーの向い側の口にいる介添人から左へ順番に、創造主に自分が誰であるか名乗ってから、祈っていった。人前で心からの願いや感謝を、赤裸々に、声を出して祈るというのは、お互いの信頼と大変な勇気が要ることだと感じた。筆者は、日本語で祈った。自分の祈りの番が終わると、熱さに耐えられずにすぐ横になった。みんなの祈りを聞きながら、早く最後まで回らないかとばかり願っていたが、祈りには、赤人種、白人種、黒人種、黄色人種という世界の4人種に始まり、4つ足や翼のあるものなど全ての生きもの、弱い者、苦しむ者、ここに

ない者など個人への祈りも含まれており、その祈りの美しさ、精神に感動した。祈りは決して強制されることはないから、黙って祈ってもいいし、歌ってもいいし、「縁あるもの全てに」とだけ言って、次に回してもよい。癒しと調和が大切だとされるスエットロッジの中では、祈りを遮ったり、公に批判したりすることはなく、真心からのものであれば、話していけないことは何もない。リーダーの祈りが終わると、リーダーについて、皆で待ちかまえたかのように「縁あるもの全てに。戸を開けてください」と大声で叫んだ。石に一番近く座っているリーダーは、最初のラウンドから最後のラウンドまで、座ったままなので強靱な精神力の持ち主でなければならない。

幕を上げたまま少し休憩し、談笑した後、また石が7つ運び込まれ、再び真っ暗になった。二回目は一回目よりも熱い。人が祈るとき、黙って聞いているわけだが、参加者は適宜微妙にトーンを変えて、共感の気持ち、慰めや激励の気持ち、賞賛の気持ちなどを、「ホゥ」という声を出して示す。真摯に祈ることにより苦しさから解放されたかのように、オイオイ大声で泣き出す人もいた。全てを吐き出すように、抑圧しないようにと言うリーダーの励ましがあがり、皆で祈りを分かち合い、支え合う無言の力が、ロッジ中に溢れていた。筆者も今度は英語で祈った。夫婦の問題、親子の問題、幼児期の心の傷、人生の苦悶や悲しみなどが吐露された。スエットの前提として、中で語られたことは、そこに留まり外へは出ないということがある。それ故、真っ暗な中で、参加者の祈りの力に支えられて、素直に心が解き放たれる環境ができるのであろう。2回目が終わると、バッファローの角をくり抜いたものを水差しとして、水が回ってきた。みんながいいと言うまで、3回ほどつぎ足した。

回を増す毎にますます熱くなり、高く「ホーッ！ ホーッ！」とか「フッ！ フーッ！」とか言うような熱さへの合図の叫びが上がる。そこで、リーダーは、3回目の途中から、なるべく短く祈るように、そして、4回目はみんなで一緒に祈るようにと言った。このようにして、ようやく4回目までやり遂げ、「縁あるもの全てに」と言いながら、服もタオルもびしょ濡れの状態で、外へ出て、参加者全員に順に握手して回った時、皆の顔は、心身共に浄化されたかのように、晴れ晴れとしていた。そのまま少し外で芝生に横になったりしてから、シャワーを浴び、みんなが持ち寄った食べ物で祝宴の準備をした。‘大いなる霊’（Wakan-Tanka=Great Spirit）や、‘祖父なる霊’（注7参照）に感謝を捧げるために一皿取り分けて林の中に供えた後、皆で感想を話したり、冗談を言ったりしながら、食事をしてくつろいだ。時間を正確に計ったことはないが、4ラウンドで2時間あまりであろう。9時頃から火の準備を始めて、1時頃スエットが始まり、食事を終え、火も落ちる頃には、5時を過ぎている。用意ができた時がスエットを始める時で、誰も時計を見る者などいなく、始めから、終わりまで、全ての時が儀式の時として同じように大切に、くつろぎの時でもあることが分かる。

これが、最初の習うより慣れろ式のスエットロッジの体験であった。¹³ 女性用のスエットは月二回満月と新月の頃、男性用のは月一回あったので、その後は、いつも火おこしの時から参加した。時にドアが開けられてから、祈りを創造主へ送る媒介としてタバコを詰めたパイプ（chanuupa）を順に吸い回して祈ったり、パイプの授与¹⁴のためにパイプがスエット中、ロッジ内に持ち込まれたこともあった。その際には、人により、精霊の色が見えたりすることがあると言われたが、筆者には何も見えなかった。

このスエットロッジは、病気や問題を抱えて苦しんでいる人、謙虚に心からインディアンの‘赤い道’ (Red Road)¹⁵ を学びたい人に、人種を問わず、開かれていたが、核は、リーダー夫婦と、その養子や養女であり、今から考えると、家族スエットと言ってもよいものであった。

スエットロッジは、4年も使うと大地のエネルギーが弱くなるので、新たに場所を変えたり、節目に作り替えたりする。第一民族学習センター裏のこのロッジも、翌年には、N'kixw'stnの大学卒業や、‘赤い道’を歩んでいないリーダーが使ったなどの理由により、刷新するために場所を変えた。ただ、若いリーダーになり、内奥の考えや真情を吐露する場としての雰囲気失われたと聞く。歌い、祈り、話し、時にユーモアを交えながら、どのように参加者相互間の精神的調和を確立するかの責任は、リーダーにかかっており、スエットの質はリーダーに大きく作用され、それにより当然集まる人も変わってくることが分かる。

スエットの実際の進行は、家族スエット、男女別スエット、男女混合スエットなど参加者の違いに加えて、目的により、種族により、リーダーにより、リーダーのビジョンなどにより異なる。筆者が他に参加したもの¹⁶だけでも、癒しの心地よい温かさのスエットロッジ、石を一度に32個も入れる肌が焦げるような猛烈に熱い戦士のスエット、癒しの歌うスエット、ドラムを叩き歌い守護霊を呼ぶスエット、全てを散放させる叫びのスエット、サンダンス直前の自らを踊るに相応しいものとする浄めのオジブエ族のスエットなどがあつた。

さて、スエットのやり方、種類を考察したところで、その歴史的流れを検討してみる。

3 スエットロッジの歴史の変遷

ここで、スエットロッジの変遷を考えるにあたって、主として参考にするのは、Raymond A. Bucko が長年に渡る研究と2年間に及ぶフィールドワークを踏まえて、スエットロッジを詳細に幅広い視点とソースから捉えて書いた *The Lakota Ritual of the Sweat Lodge* (1998) という客観性と信頼性の高い研究書である。

ギリシャ、ロシア、フィンランド、アイルランドなどにも、スエットロッジと同じようなサウナや蒸し風呂が古くからあつたことが分かっている。Joseph Bruchac (17) によると、北米スエットロッジの記録は10世紀初頭のマヤ文明、16世紀初めのアステック文明などに遡るようだが、現在広く行なわれているものの原型である平原部族スー族のスエットに関する最初の記録は、17世紀末のダコタ・スー族のものである。焼き石や、歌を媒介として、病気治癒を目的としたとある。その後19世紀初頭まで記録は途絶えるが、その頃には、宗教儀式として記録されている。ダコタ族よりさらに西部、主としてサウス・ダコタ州に居住するラコタ・スー族の記録は、19世紀末に見られる。円形のロッジ、柳の枠組み、東の入り口、焼き石、杉やセージの使用が認められるが、肉体的治癒に重きが置かれており、その精神的意義や、霊の働きへの言及がなくなっているのは、宣教師など部外者に受け入れやすくするためだっただろうとBucko (30—40) は言う。しかし、1873年に、米連邦政府により、ほとんどの伝統的儀式とともに、スエット・ロッジへも禁止令が出され、その政策は1930年代まで続いた。カナダでは1880年頃から1950年頃まで同様の政策が採られた。その結果、現在アメリカやカナダの各地で広く行なわれているスエットロッジは、政府や宣教師による抑圧の時代にも諦めることなく継

承してきた、ラコタ族の‘inipi’の形式であることが多い。抑圧により失われたスエットの聖なる儀式的知識は、ラコタのメディスンマンであった Black Elk, Lame Deer, Fools Crow 等の直伝書の喧伝などにより、他部族にも再び浸透していった。特に、Joseph Epes Brown が Black Elk にインタビューして書いた *The Sacred Pipe* (1953) は、スエットロッジに関する初めての詳しい象徴的解釈を交えた記述であり、先住民だけではなく、非先住民にも広く読まれており、入門書として、また、伝統的スエットロッジの基軸として変遷を考える際にも重要である。さて、このようなわけで、1960年代に、Black Elk は白人支配に抗する伝統的インディアンの象徴として考えられるようになり、1968年に結成された「アメリカインディアン運動」(American Indian Movement)¹⁷においては、スエットロッジが、インディアンの政治意識の高揚、及び、アイデンティティー確立への精神的基盤の一つとして用いられるようになった。1970年から80年にかけて、それは、汎インディアン宗教運動としてさらに広まっていったのである。¹⁸

現在では、スエットは、「先住民アメリカ教会」(Native American Church)¹⁹やキリスト教の枠組みで使われたり、ヨーロッパ人、特にドイツ人を含む白人で、先住民の精神世界に興味を抱く人や研究者が参加したりしている。一方、先住民が非先住民を対象にスエットを開いたりもする。日本でも、富士山麓で催されていると聞く。これに、ニュー・エイジ・グループによる独自の解釈に基づいたスエットもある。また、参加者として、インディアンだけしか受け入れないスエットもある。しかし、祈りの言葉に見られるように、ラコタの世界観の根本となるその包容性のゆえであろうと思われるが、ほとんどのスエットが、非インディアンを受け入れている。その際、大切なのは、その個人の精神志向性であり、謙虚さ、真摯さであると言えるようだ。

4 スエット儀式的象徴的意味とその多様性

さて、スエットの多様性を考える具体的一例として、*The Sacred Pipe* (20, 31-32) で詳述されている Black Elk によるスエットロッジの象徴的解釈を考えてみる。スエットでは、宇宙の全ての力、すなわち、水、土、植物、空気、火を使用する。低きを流れる水は、謙虚さ。祭壇に盛られた土は、大地。落葉樹の柳は、死と再生。石は実りの源である祖母なる大地であると同時に、不滅の‘大いなる霊’である。火は‘大いなる霊’の働き、永遠の火、浄化の火となる。祈りを捧げる対象となる聖なる4方向に関しては、西は、水を浄化する源で、雷が司る。北は風を浄化する源で、はげ鷺が住む。東からは、知恵と光が訪れ、明けの明星が居を定める。南は、生と死を表す。この全てが、結局は‘大いなる霊’の力の顕現なのである。入り口は、知恵の光がそこから訪れる東に常にある。ロッジの中の闇は、魂の暗黒、我々の無知を表し、光でそれを浄化する必要がある。入り口を4回開けて明かりを入れるのは、人生の4期に渡り‘大いなる霊’の働きにより受けてきた黎明を表す。1回目のラウンドは、西、2回目は、北、3回目は、東、4回目は、南と、それぞれの力を請う。

ここで、面白いのは、Lame Deer や Black Elk の甥で強力なメディスンマンであった Fools Crow は、入り口は陽の沈む西にあると言っているし、両者におき、その他多くの象徴的意義の

違いがあることである。また、Bucko による多数の個人的体験の記述、および、筆者の体験などで分かるように、Black Elk 以降の人が、この *The Sacred Pipe* を忠実に守らなければならない教典としては扱っていないことである。従って、ラウンドの意味も、基本概念に付与する象徴的意味も様々である（注 6，8 参照）。

このスエットロッジの柔軟性、適用性、革新への寛容性を説明する理由として、Bucko は、次のことを挙げている。まず、過去との継続としての伝統は、親戚とか指導者から個人的に口承で継承してきたものであるということ（64）。その過程におき、そこには当然多様性が出てくる。また、スエットを行なうリーダーは、慣習として行なわれてきたことに、ビジョンや夢で得られた革新的やり方を個人的に取り入れていくということ（70）。霊は異なる人々を異なるように導くと言うように、伝統とインスピレーションの組み合わせで、いろいろな象徴性や解釈が生まれてくる。さらに、リーダーのやり方が気に入らなかったり、相性の悪い人が居たりすると、それに対抗せず、黙って抜けて、別に始めるというラコタのやり方により、スエットが分化することにも説明は求められるであろう（238）。

しかし、この多様性の中で、伝統的共通項は何かというと、ロッジは円形で、入り口は通常一つであること。入り口を閉めた後、焼き石に水を掛け、ラコタ語の歌を歌い、祈り、それから、入り口を 4 回開けるという過程などである。では、多様なスエットの中から、何により、あるスエットを正当なものと評価するのかということになると、「そのスエットに参加していると気持ちがいい」、「癒される」というような経験的なことであるのだろう。その基準として、Bucko（121）は、それが有効であるか、先例に準拠しているか、文献で例証されているか、インスピレーションに基づいているか、実利的であるかななどを挙げている。さらに、それが営利目的でないということも大切な点である。では、ここで、スエットの目的は何であるのかを整理、検討してみる。

5 スエットロッジの目的

Bruchac や Bucko が収集した伝承物語には、魔術で病を治したり死者を蘇生させたりするのに使われたというスエットロッジの呪術力を強調するものがあるが、まず、その医学的影響から考えてみる。Bruchac（10）は、身体的効用として、次の 4 点を挙げている。まず、熱により、毛穴が完全に開き、毒素が出るという物理的作用がある。第二に、ビールスや、バクテリアの多くは熱で破壊されるので、その種の病気を治癒できる。第三に、体温が上がることで、内分泌腺が刺激されて、毛細血管が広がり、器官から不純物が排泄される。最後に、熱した岩に水をかけると、マイナス・イオンが大量に放出されて、疲労や、緊張緩和に役立つというのである。実際に、スエットが終わると、肉体的に過酷だった気はするが、気分は爽快で、肌もつるつる滑らかになり、新陳代謝が良くなる。

Black Elk（Brown, 43）は、狩猟や、戦闘など大きな出来事の前に、身を浄め、力を得ることを願い行なったと語っているが、現在でも、目的達成の誓願や、戦争、大病、死など人生の節目、重要な儀式の前後に同じ目的で行なわれており、それに加えて、70年代以降は社会的病氣、すなわち、アルコール中毒、薬物中毒、エイズ、家庭崩壊、暴力、貧困など肉体的、心理

的、個人的、集合的病いへの癒しとしての役割が大きくなってきている。Bucko (90) の考察によれば、苦痛を伴う祈りは霊の注意を引き、その人を霊の助けに相応しいものとし、病気がスエットの熱や蒸気により治るのと同じように、声を出して祈ることにより心も癒されるようだ。そして、その結果、参加者の帰属意識が高められ、精神的喜びを感じるとともに、気分も一新できるということで (60)、これは筆者の経験と一致する。さらに、Bucko (7) は、先住民は、公衆の場での露な感情表現は通常しないので、スエットが、公的、私的感情表明の場を作っていると言う。要するに、現代におきスエットの目的は、浄め、力の賦与への願いであるのは言うまでもなく、時代の流れ、要求に応じて、特定の病気の治癒というより、精神面、生活上の問題の解決や導きというカウンセリング的役割の方が強調されてきているようだ。次章では、現代社会におけるスエットの意義を考えてみる。

6 現代におけるスエットロッジの意義

この儀式が、現在先住民の間で、それ自体単独で広く行なわれている理由の一つとして、これが、北米インディアンが政府の同化政策により何代にも渡って受けてきた傷²⁰を解きほぐし、自らのアイデンティティーに誇りを持てるような癒しの場として、さらに、‘大いなる霊’とともに生きていく道、すなわち、‘赤い道’を選び、生まれ変わることを意味するとして、積極的に取り入れられているからであろうと思われる。なぜなら、ロッジ内は、Ed McGaa (62) が言うように、「過去との深いつながり」を取り戻し、「‘大いなる霊’や‘母なる大地’との生来の絆」が確認できる場所であるからである。それが、この儀式が更新と再生の儀式とも言われるゆえんであろう。また、前述したラコタの儀式の多様性が示しているように、ラコタの儀式において、権威が集約されておらず、非常に民主的に外部の者を受け入れ、同化していくというその柔軟性が、かえって逆に、内部では、ラコタの結束や、同胞意識を高め、外部に対しては、ラコタの儀式の人気を増大させるように作用してきたというのが Bucko の解釈である (95, 121)。そして、過去の力への回帰という過去とのつながりを持ちながら、時の要求に合わせ、対処、変化していく自由な非拘束性が個人々人へのその意義を高めていると言えるだろうと思われる。また、リーダーにより進め方は違うが、基本的には同じ形式であるので、霊的、精神的、感情的、肉体的バランスを伝統的に重んじてきたインディアンのホリスティックな癒しの場として、インディアンの連帯感を確認するという意義もあると言えるだろう。そして、高度に文明化された社会に住む非先住民には、先住民のホリスティックな世界観に参与することにより根元に立ち帰る機会を与えていると言えよう。

7 おわりに

筆者にとってスエットロッジというのは何であったのだろうか。内奥の秘密を分かち合い、支え合うスエットロッジの参加者には特別な絆が生じるものである。参加しながら、そのスエット家族として筆者を受け入れてくれたインディアンの人達の心の広さを感謝するとともに、生まれ落ちた時から偏見と差別に曝されてきた先住民としての苦しみや悲しみの深淵に触

れ、それほどの問題や苦しみを持たない人間が、一緒に居て聞いていてよいのだろうか、という部外者の戸惑いのようなものを時に感じたことがある。しかし、教えに際しては非常に厳しいリーダーの下で、伝統的やり方をしっかり習ったことにより、どんなスエットロッジに参加しても、無知による過ちや非礼を犯さないで済むようになったし、それ以上に、大切な思いを分かち合うことの楽しさ、集合体としての祈りの力の量り知れない強さを、知らず知らずのうちに、リーダーから体得できた意味は大きかった。いかにスエットが心身ともに一新するのに役立っているかは、ただ「スエットをしたい」、「みんなと分かち合いたい」と、その苦痛にもかかわらず、身体のリズムが告げるようになることから明らかであろう。

最後に、先住民の知恵や、その儀式の純粹、かつ、根元的で、力強く、美しい世界を知る扉を筆者に開いてくれた N'kixw'stn James とご主人の John O'leary に感謝を捧げる。

注

- 1 インディアンの最も聖なる儀式と言われるサンダンスは、4日間絶食、ほぼ絶水で夜明けから日没まで祈りと肉体の苦痛を捧げて踊るというもので、その際、朝、晩一回スエットをする。ビジョンクエストは、聖なる山にこもり、体力に応じてではあるが、4昼夜、絶食、絶水で、祈りを通して、霊の助けによるビジョンや夢などを求め、人生の導きや助けを得るために行なうのだが、サンダンス前にも事前準備として行ない、その際にも、開始前、終了後にスエットをする。
- 2 N'kixw'stn James は Lytton 出身の Lil'wat 民族のメンバーである。スエットのリーダーの資格として一般に必要であると考えられている、サンダンサーであり、パイプ保持者 (pipe carrier, 注14参照) である。軍隊を退役してから、ご主人の James O'leary と協力して、先住民のスピリチュアル・リーダーとしての仕事を使命として若手の育成に努めている。52才で教育学士の資格を取り、小学校教諭としても情熱を傾けていたが、現在修士課程に在学中である。
- 3 先住民社会においてトーキング・サークル (円座で順に話をする集い) や、ダンスなど、何をするにも時計回りである。それが、太陽や月の動きと同じ自然の法則に適ったやり方であるからである。
- 4 このスエットでは、N'kixw'stn のご主人と、養子の息子の Jean がいつも火番だった。火をおこし、薪を割り、6時間あまり火を燃やし続けなければならないし、door keeper として入り口の開閉、石の搬入、水の世話もするので重労働である。この人達の助けなくして、スエットは成立しないが、この労働を通して、この人達もロッジ内にいる人と同じ、あるいは、それ以上の恵みを受けると言われている。
- 5 平原州のラコタ・スー族ではセージが使われているが、北方のカナダでは杉 (cedar) である。しかし、杉と言っても、日本の檜に近い。
- 6 Lame Deer (177) によると、ロッジ内は宇宙であり、全ての生きものの精霊が集うところとなる。Fools Crow (101) も、治癒のために守護霊を呼び入れたのだが、その数は最高405と述べている。
- 7 このスエットでは、Creator と言っていたが、'大いなる霊' (Wakan-Tanka=Great Spirit) と同じことだろうと思われる。全てのものに霊が宿り、その上に最高位の、最も聖なる存在として Wakan-Tanka があるのだが、Grandfather (Grandfathers), Grandmother (Grandmothers) に対してそのような呼びかけていることもあり、個々人が具体的にそれぞれをどのように位置づけているのかは曖昧であり、祈りに向ける先は個人の自由に任されているようである。なお、Fools Crow (120) は、Wakan-Tanka は神、Tunkashila は、それより少し力が弱く、神の息子、そして、それに仕える精霊がおり、その関係は、キリスト教の三位一体と同じようなものと述べている。
- 8 Ed McGaa は *Mother Earth Spirituality* (65—72) で1回目は西の '大いなる霊' に霊的導きを祈

- り、2回目は北のラウンドで、浄めと、勇気を願い、3回目は東のラウンドで知恵を請い、個人的祈りをするためであり、4回目は南のラウンドで、癒しと成長を願うと述べており、それぞれの祈り方を挙げている。一方、Fools Crow (97—99) は病気の治癒を目的に、病状の説明や霊を呼ぶ歌に加えて、石を訪れる霊の声を聞き交信を深めていくために、4つのラウンドを段階的に用いている。また、Raymond A. Bucko の体験例 (1—12) には、ラウンド毎に異なった象徴的意味がある。これらの例により、基本は同じだが、祈りの種類、意義には多様性があることが分かる。
- 9 いかなる先住民の聖なる儀式においても、飲酒、薬物使用、写真撮影、および、生理中の女性の立ち入りは禁止となっている。中毒者が癒しのために参加したいときには、その影響を断ってからでないといけないことになっている。従って、儀式中、また、儀式後の祝宴でも一切アルコールは飲まない。生理中の女性用にはムーンロッジというのが設置されている。
- 10 こうすることにより、水が‘祖父の霊’の恵みを受けて、聖なる水となるのだらうと思われる。Black Elk (Demallie, 123) は、水は悪い霊を打ち負かす力を人間に与えてくれると言う。石に掛ける水は霊への捧げものである。
- 11 水は、西北東南の4方向、母なる大地、父なる空、Wakan-Tanka にそれぞれ捧げる。
- 12 歌は公のものだったり、個人のものだったりするので、まずその由来の説明がある。歌は祈りの一形式であり、スエット中に精霊の働きかけにより歌がある個人に授けられることもある。繰り返しが多いので歌いやすく、皆で唄うことにより強いエネルギーが生じると言われる。
- 13 先住民の伝統的学習法は、良く観察し、做うことである。また、教えは、その都度必要に応じて与えられるので、忍耐強く待ち、その場に居合わせるということが大事なことになる。ただし、学習上必要だと判断すれば、自由に質問する機会を設けてくれる。
- 14 聖具として扱われるパイプは、親から受け継いだものであったり、それを持つに相応しいと認められた時に、人から授与されるものである。インディアンとしての正しい道、‘赤い道’ (Red Road, 注15参照) を歩んでいる証となるパイプを持っていることは、パイプ保持者の人々への責任を伴う。助けを必要とする人に、タバコで以て儀式を依頼された時には、個人的なことは何を置いても、それを執り行なう義務があると言われる。
- 15 Red Road というのは、‘大いなる霊’に沿った、自然や周りのものとの調和やバランスがとれた生き方を実践することで、Black Road (アルコールや薬害中毒などに浸り心が病んだ、正道から外れた生き方) と対照して使う。
- 16 スエットロッジは、教会などと同じく、所属するところが自然と決まってくる。筆者は、N'kixw'stn の許可を得て、BC 州 Merrit でのサン・ダンス (1996年7月30日—8月2日) 後4日間に行なわれたもの、北バンクーバーの Burrard 居留地で定期的に3人のリーダーの下に行なわれていたもの、及び、ノース・ダコタ州タートル・マウンテンでのサンダンス (1998年7月30日—8月2日) 前4日間に行なわれたものにも参加した。N'kixw'stn は、宗教儀式を売り物にして、お金を取って執り行なわれるスエットには、反対であった。これは、多くのインディアン指導者が、嘆かわしい現代の風潮であると感じていることである。
- 17 伝統への回帰を提唱した AIM が Washinton, D. C. のインディアン局本部を占拠 (1972) したり、Wounded Knee を72日間占拠 (1973) したりという力に訴える方針を採ったことには問題はあったが、少なくともインディアン問題に対して全国的関心を喚起し、インディアンとしての尊厳や誇りを高める作用をした (Malis, 25, 216参照)。
- 18 Joseph Bruchac, *The Native American Sweat Lodge: History and Legends*, 2—3, 14—28; Raymond A. Bucko, *The Lakota Ritual of the Sweat Lodge: History and Contemporary Practice*, 145—167参照。
- 19 1913年にラコタの居留地で始まった信仰で、peyote を使用するので peyote cult とも呼ばれるが、

キリスト教をかなり取り入れている (Ruby, 53参照)。

- 20 浜由美子「カナダ先住民への同化教育：寄宿学校制度」『十文字学園女子短期大学研究紀要』第27集
1996年 73—90頁参照。

参考文献

- Brown, Joseph Epes, ed.. *The Sacred Pipe : Black Elk' s Account of the Seven Rites of the Oglala Sioux*. Oklahoma : University of Oklahoma, (1953) 1981.
- Bruchac, Joseph. *The Native American Sweat Lodge : History and Legends*. Freedom : Crossing Press, 1993.
- Bucko, Raymond A.. *The Lakota Ritual of the Sweat Lodge : History and Contemporary Practice*. Lincoln : University of Nebraska Press, 1998.
- DeMallie, Raymond, ed.. *The Sixth Grandfather : Black Elk' s Teachings Given to John G. Neihardt*. Lincoln : University of Nebraska Press, 1984.
- Erdoes, Richards & John Lame Deer. *Lame Deer Seeker of Visions : The Life of a Sioux Medicine Man*. New York : Simon and Schuster, 1972.
- McGaa, Ed (Eagle Man). *Mother Earth Spirituality : Native American Paths to Healing Ourselves and Our World*. New York : Harper Collins Publishers, 1990.
- Mails, Thomas E.. *Fools Crow*. New York : Doubleday & Company Inc., 1979.
- Ruby, Robert H.. *The Oglala Sioux*. New York : Vantage Press, Inc., 1955.
- Stolzman, Fr. William. *How to Take Part in Lakota Ceremonies*. Chamberlain : Tipi Press, 1986.

(研究ノート)